

看護学科学生の解剖見学実習の意義

古屋 肇子*, 野村幸子, 阿部真幸, 葛場美那,
佐藤寿哲, 瀬戸口要子, 古谷昭雄

大阪青山大学健康科学部看護学科

The significance of Practical observation of dissected cadavers in Nursing students

Hatsuko FURUYA, Sachiko NOMURA, Masaki ABE, Mina KUZUBA,
Toshiaki SATO, Yoko SETOGUCHI, Akio FURUTANI

Faculty of Health Science, School of Nursing, Osaka Aoyama University

Summary On-site observation of human dissected cadavers was conducted in “Anatomical Physiology II”, a required course in the second semester of the first year of the school of Nursing, a new department established in this academic year. In the present study, we positioned this on-site anatomy program as experiential learning based on active learning, and assessed effects of this learning program on students based on results of a questionnaire survey conducted after the on-site anatomy program. The survey, which consisted of 10 items and free responses, was conducted anonymously after the conclusion of the course. The survey responses were obtained from 87 students (response rate, 96.7%). A total of 80 students (92.0%) answered that this on-site anatomy program should be maintained as part of the course. In addition, 75 students (87.4%) answered that the program “provided an opportunity to think about the thoughts of diseased individuals and their families who donated their bodies for advancement of medicine. The free responses revealed that, through the experiential learning by seeing and touching the cadavers during the on-site anatomy program, the advanced their understanding through textbooks to an experiential understanding in which they confirmed what they had learned from textbooks, and became satisfied through the sensation of having obtained a true understanding. This experiential learning was found to enable the students to deepen their understanding of and interest in the human body and encourage them to think about death in humans. Thus, this program was found to be a form of active learning that promotes motivation to study nursing.

Keywords: on-site human anatomy program, nursing student, awareness survey, active learning

はじめに

医療の高度化・複雑化や入院患者の高齢化等による社会の看護へのニーズの高まりに対し、看護教育は卒業時の看護実践能力の強化を求められている。具体的には学士課程における看護基礎教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時の到達目標が提示された¹⁾。解剖学については看護実践能力の「Ⅱ. 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」の中で、身体的な健康状態をアセスメントすることができるための教育内容の一つとして人体の構造や機能が示されている。看護

は生活者の視点で対象を把握する。健康状態を理解するときには人体としての身体面、認知機能や心理面、生活の場である家族や社会面の健康状態をそれぞれアセスメント・統合し、把握する力が求められる。また、平成20年、中央教育審議会答申において大学のユニバーサル化を受け学習成果として学士力が示された²⁾中で、態度・志向性の一つに大学を卒業後も自律・自立して学習できる力として生涯学習力が示されている。これは看護学士課程における看護実践能力の卒業時の到達目標「V 専門職として研鑽し続ける基本能力」³⁾も同様のものである。学生が卒業後、専門職として

*Email: h-furuya@osaka-aoyama.ac.jp
〒562-8580 箕面市新稲2-11-1

主体的に学び続ける力を看護基礎教育の中で育成することが求められている。一方、主体的に学ぶ力を培うためには、従来の受け身的な学生の受講態度ではなかなか身につくものではない。2012年中央教育審議会の大学教育の「質的転換」答申では、アクティブ・ラーニングを中心とした授業への転換によって、学生の能動的学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められている。

アクティブ・ラーニングとは、文部科学省用語集の定義によると、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法であるとされている。

看護学科の授業科目は、「基礎教育科目」という教養科目、「専門基礎科目」という医療に関する基礎科目、看護に関する「専門科目」の3つに分類される。1年生で開講される科目の多くは講義形式であるが、看護技術を学生間で行う演習授業や病院での基礎実習も行っている。1年生の前期から、講義で看護の基礎を学びながら、演習でベッドメイキングや洗髪、清拭などの技術を勉強しており、8月末から1週間1年生の臨地実習が行われた。学生は病院実習で、実際の患者さんにお話を聞きスタッフのケアを見学することで、患者さんが安心して過ごせるためのきめ細やかな配慮など看護という仕事の範囲の広さや、看護の根拠に基づいて自律的に看護を行っている様子など、講義を受けイメージしていた自分の中の看護との違いに気づく。そして学生は自分に何が足りないかを知り、看護を学ぶための動機づけを高めていく。

このように看護学生は「専門科目」により、講義→学修→演習→学修→実習→学修の繰り返しの中で、病院で（ほんのごく一部の体験に過ぎないが）実際の看護の仕事に触れる体験を通して、学ぶことへの動機づけを強化し、看護学生としてのアイデンティティを形成していくと思われる。

一方、必修2科目4単位が1年生の前期と後期に分けて開講されている「専門基礎科目」の中の解剖生理学でも、前期の解剖生理学Ⅰの講義と期末試験が終了し、後期の解剖生理学Ⅱが始まって2ヵ月目、アクティブ・ラーニングとしての解剖見学実習が行われた。解

剖生理学を学ぶ目的は、人体を知ることである⁴⁾。人体の構造と機能に関する科目は、対象を理解する上で最も基礎となるものであり、理論的根拠に基づいた看護活動を行うためにも重要である。解剖生理学の講義では、教科書の解剖図や人体模型を提示し、学生は人体の細胞から骨格や臓器などの名称をおぼえ、しくみ・働きなどを理解していく。学生にとって、実際に見たことがない身体の内側の詳細をイメージし、次々に暗記や理解をしていくことにはかなりの努力が必要である。その理由の一つとして、看護を学び始めたばかりの学生には、講義で得た解剖生理学の知識と看護の統合の難しさがあると思われる。坂下・内布ら（2004）⁵⁾は、看護教育における解剖生理学の科目は、生活援助や臨床看護の視点に乏しく、実際の臨床の場面での看護ケアの展開に直接つながっていかないという問題点をあげている。そして、その対応策の一つとして、解剖実習が人体の理解に役立つことを示唆している。解剖見学実習の実施は、各養成学校の裁量により行われている。解剖見学実習を行っている大学の中には、医学部付属病院を持つ他大学に依頼し、本学科同様の解剖見学実習を行っている看護系大学があるが、その方法は一様ではない^{6)~9)}。行っている大学の中には、学習内容マトリックスを作成し、注射の際に損傷の危険がある神経や血管の走行を解剖実習により確認し、実際に注射器を当てて安全な注射部位の選定方法の根拠を確認するなど、看護学と解剖生理学とを有機的に関連させながら実習を行っているところもある⁶⁾。解剖実習が解剖生理学の知識と看護実践の統合の橋渡しをすることで、学生は「解剖学と看護を結びつけて人体の構造について深く理解できた」「学習としては非常に有意義でこれから活かせるものとなった」など、理解できたことへの実感を持ち、次の学びに活かせるという意欲と自信を持たせたことを記述している文献も見られる⁷⁾。

看護学科開設後初めて行われた解剖見学実習について、効果や今後の改善点などを検討するために、後日事後指導時に学生へのアンケート調査を行った。この体験学習を通して、学生が解剖見学実習をどのように感じながら学び、自分の中の変化に気付いたかをアクティブ・ラーニングの視点から報告する。

方法

1. 解剖見学実習の内容

1) 見学実習の位置づけ

解剖見学実習を履修する学生の学習内容は、専門基礎科目では人体の構造と機能に関する科目として解剖生理学Ⅰ、後期は解剖生理学Ⅱと人間生活工学の2科目である。専門科目では前期には看護学概論、基礎看護援助論Ⅰ、基礎看護学実習Ⅰの3科目であり、後期は基礎看護援助論Ⅱと看護理論の2科目がある。

解剖見学実習は後期の半ば頃に実施している。見学実習時間は3時間である。

2) 解剖見学実習事前オリエンテーション

見学実習に先立って科目担当教員により5回のオリエンテーションを実施した。

1回目は、見学実習を行うにあたり、実習の心構えや諸注意を述べるとともに、ご遺体やご遺族の皆さんの意向を伝える。さらに解剖見学によって学ぶことの意味や意義について説明を行った。2回目は、前期の講義中に資料として配布した、骨格系の全景（前面）、骨格系の全景（後面）、筋肉系の全景（前面）、筋肉系の全景（後面）の4枚のプリントについて、重要な骨格、筋肉をピックアップして説明し、その関連について教科書での骨格系、筋系を参照しながら解説を行い、この学習をもとに復習することを義務づけた。3回目は、前期と後期の講義中に資料として配布した、内臓系の全景（前面）、内臓系の全景（後面）、脈管系の全景、神経系の全景の4枚のプリントについて説明し、特に内臓系については解剖見学実習の一番重要な部位であることを力説した。その関連について教科書での循環器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、生殖器系を参照しながら解説を行い、この学習をもとに復習することを義務づけた。4回目は、人体標本の写真（ジオジャパン）をスクリーンに映写しながら解説を行った。また、DVD（医学書院）やiPadでのARコンテンツ（メディカ出版）を映写し、視聴覚的に学ばせ、理解が深まるよう指導を行った。5回目は、最終の事前指導になるため、学生には「解剖見学実習要綱」を配布し、解剖見学実習の目的および到達目標、実習施設、実習方法、実習の心得等の他、「死体解剖保存法」抜粋、「医学及び歯学の教育のための献体に関する法律」等について説明と解説を行った。

3) 実習グループおよび指導体制

実習学生は91名で、1グループ4名で形成し、23グループに分かれて1グループ1体のご遺体で実習を行った。各グループは系統解剖を意識して「人体臓器観察のチェックリスト」に従って進めさせた。実

習指導は、死体解剖保存法にもとづき、解剖生理学担当教授1名の指導・監督のもと、医師2名の他、その他学生の対応のために看護の教員5名が付き添った。

4) 実習の開始から終了まで

実習を始めるにあたり、学生と指導教員がそろってご献体に黙祷をささげた。その後、解剖生理学担当教授より手順、ならびに留意点の説明を行った。学生は各グループごとに「人体臓器観察のチェックリスト」に従って進めさせた。不明な点等については指導教員の助言を参考に確認作業を行わせた。また、男性のご献体と女性のご献体を交互に観察させ、ご献体の状態があまり良くないグループには、良い状態のご献体を観察するよう指示を行った。実習の最後にはご献体に対して学生と指導教員がそろって黙祷をささげ、献体者への感謝の気持ちとご冥福をお祈りし、実習を終了した。実習終了後、学生は、1週間以内に「解剖見学実習での学び」についてのレポートと「人体臓器観察のチェックリスト」を提出させた。

5) 解剖見学実習事後オリエンテーション

解剖見学実習終了後の次週の講義時間の1コマ分（90分）を事後指導にあてた。解剖見学実習が無事終了たことに感謝し、献体者やご遺族の皆さま、指導教員の方々の理解と協力をいただいたことにより当初の目的が達成されたことを力説して講話を行った。

事後指導の内容としては、①各学生よりの感想②当日参加の指導教員からの助言・感想③解剖生理学に対する今後の学習姿勢の3項目についてまとめと指導・助言を行ったのち、解剖見学実習後のアンケート調査（無記名）を実施した。今後はこの解剖見学実習を通して解剖生理学と看護学の学習を有機的かつ機能的に関連させながら学習が進められていくことを期待し、事後指導のしめくりを行った。

2. 調査概要

1) 目的

解剖生理学を学ぶ上で、解剖見学実習を取り入れることの教育的効果を明らかにする。

2) 対象

対象は看護学科1年生90名。

3) 方法

先行研究⁹⁾を参考に作成した2件法9項目（一部逆

転項目を含む)の他、今後の解剖見学実習継続について、自由記述からなるアンケート調査(表1)を、解剖見学実習後の事後指導時に学生に行った。また、事後提出レポートの内容から、学生の解剖生理学の授業から得た「知る」知識が、解剖見学実習によってどのように体験的に「わかる」理解へ変化していったかがわかるものを抜粋し参考にした。

4) 調査期間

平成27年11月～12月

5) 倫理的配慮

アンケートは無記名で、学生には回答の義務はなく、回答の有無で科目の成績には影響がないことを文書で、また個人を特定できないことに配慮し研究・発表に使用することを口頭で説明し、記入後の提出をもって承諾と受け止めた。また、本研究は大阪青山大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得た。

6) 分析方法

9項目は割合の算出を行い、自由記述は一文毎に学びの内容についてカテゴリー化を行った後、カテゴリー名と分類内容についての整合性の検討を行う。

結果

授業を出席した88名中87名(回収率98.9%)から回答が得られた。

1. 学生の解剖見学実習での学びと実習に対する怖さや不安等気持ちの変化について

「目で見ることによって臓器の位置関係の理解が深まった」学生は80名(92.0%)、「手で触ることによって臓器の感触の違い等がわかった」学生は84名(96.6%)「一人ひとり臓器の大きさや形、色等が異なり個性差がわかった」学生は84名(96.6%)、「性別・年齢による臓器の違いについてわかった」学生は63名(72.4%)であった。「人体への知的好奇心が高まり学習への動機づけとなった」学生は70名(80.5%)、「命の尊さ・人体のしくみの素晴らしさが学べた」学生は80名(92.0%)であった。「医療の発展を願い献体をしてくださった方・家族の思いを考える機会となった」学生は74名(85.1%)であった。また、「怖さや不安、ショックが大きくなれば今後は見学を避けたい」学生は0名、「怖さや不安、ショックはあったが見学を通して気持ちが前向きに変化した」と答えた学生は55名(63.2%)であった(図1)。

表1 平成27年度 看護学科 解剖実習事後アンケート調査

看護学科では解剖見学をして皆さんがどのような学びをしたのかを把握することで、今後の見学実施の参考にしたいと思いますので、以下の質問に率直なご意見をお聞かせください。当てはまる番号に○を記入して下さい。回答の有無で科目の成績評価には影響しません。	
質問項目	
1. 目で見ることによって臓器の位置関係の理解が深まりましたか	
2. 手で触ることによって臓器の感触の違い等がわかりましたか	
3. 一人ひとり臓器の大きさや形、色等が異なり個性差がわかりましたか	
4. 性別・年齢による臓器の大きさ等違いがわかりましたか	
5. 怖さや不安、ショックが大きくなれば今後は見学を避けたいですか	
6. 怖さや不安、ショックはあったが見学を通して気持ちが前向きに変化したか	
7. 人体への知的好奇心が高まり学習への動機づけとなりましたか	
8. 命の尊さ、人体のしくみの素晴らしさが学べましたか	
9. 医療の発展を願い献体してくださった方、家族の思いを考える機会となりましたか	
10. 今後も見学は続けた方がよいか	a. 続けた方がよい b. なくてもよい c. どちらでもよい
11. その他	

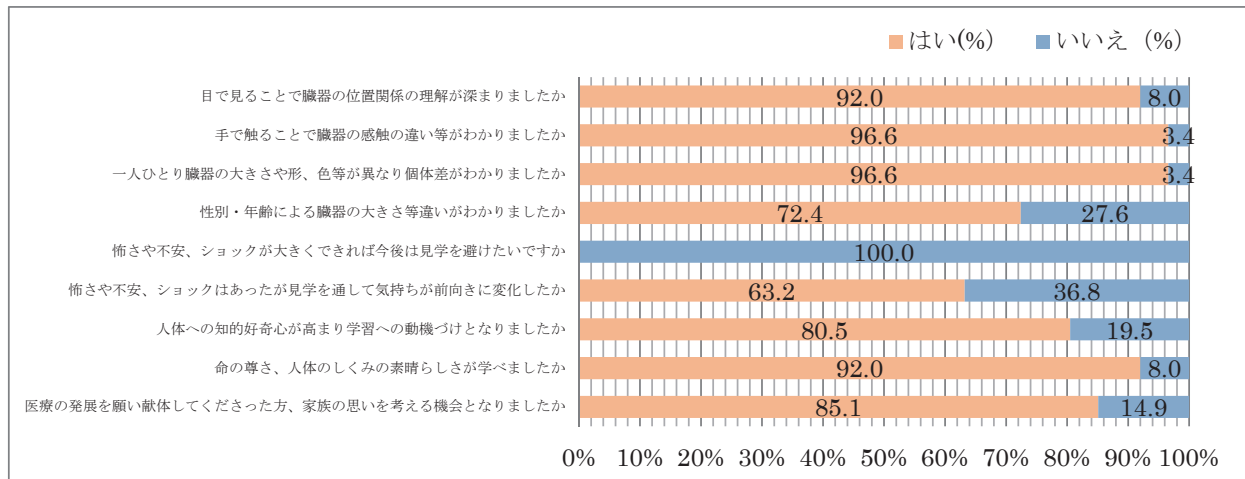


図1 平成27年度看護学科解剖実習事後アンケート結果 n=87

2. 解剖見学実習継続について

解剖見学実習を続けた方がよいと答えた学生は79名(91%)、なくてよいが0名、どちらでもよいは7名(8%)であった(表2)。

表2 解剖見学は続けた方がよいか (n=87)

よい	79 (91)
なくてもよい	0
どちらでもよい	7 (8)
不明	1 (1)
計	87 (%)

3. 解剖見学実習についての自由記述

「その他」記入欄に書かれた37文の自由記述内容について分類した結果、5つのカテゴリーを抽出した(表3)。

1つ目のカテゴリーは、「教科書に書いてあることだけでなく、実際に見て触ることでより理解が深まった」、「講義で勉強するより実際目で見たほうがより臓器の大きさや配置などがわかった」、「絵で見るとは違い、実際に触れることで大きさや感覚がつかめ、医療従事者である看護師に向けた今後の知識の幅が広

表3 学生の感想・意見(自由記述 一部)

カテゴリー	記述例(一部)
教科書の知識から臓器を見て感じてわかったという実感覚への転換	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で聞いたり、動画を見るだけではわからないと思う。だから、実際に触れたり見たりいい機会になった。 ・教科書に書いていることだけでなく、実際に見て触ることでより理解がふかまったのでごくよい体験になった。 ・実際に見ることで感じるがあった。 ・絵で見るとは違い、実際に触れることで大きさや感覚がつかめた。
人の生死を考える機会	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の実習を通して、人の生死について考えるきっかけにもなったし、以前に考えていた時と気持ちがまた変わった。 ・看護師とは人の死を受け入れていかなければならない職業であり、そのことを考える良い機会となった。
貴重な体験である解剖見学実習の継続必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の見学は自分のためになったので、もし次の機会があればまた参加したい。 ・二度とないとても貴重な経験だと思うので、自らが体験できることとして今後も行うべきだと思う。 ・こういう本物に触れる機会がもっと欲しい。 ・このような体験はめったにないと思うため、今後もできるのであれば続けていった方がいい。
不安やショックから知的好奇心への転換	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にご遺体を見て大丈夫なのかと不安だったが、もっと違いを知りたいと積極的に見て回ることができた。 ・寝る前にフラッシュバックがあってびっくりした。初めての経験でショックを受けていたのかもしれない。でも、そのショックよりも、学べたことの方が大きくて、私は見学できてよかった。
解剖見学実習への要望	<ul style="list-style-type: none"> ・付き添い教員がもっといれば質問しやすい。 ・もう少し詳しく見学についての説明をして欲しかった。 ・できれば解剖学が終わりすぐに見学しに行く方が、生理学に進むための準備になると思う。 ・一年次だけでなく、毎年見学に行きたい。 ・来年度もだができることなら自分たちももう一度してみたい。なぜなら、より知識・経験があれば今後大きく繋がるから。 ・すべての臓器を観察する時間がもっとあって欲しかった。

がる」、など<教科書の知識から臓器を見て感じてわかった感覚への転換>であった。

2つ目のカテゴリーは、「看護師とは人の死を受け入れていかなければならない職業であり、そのことを考える良い機会となった」、「命と大きな関わりがある仕事をする」、「看護師とは人の死を受け入れていかなければならない職業であり、そのことを考えるきっかけとなった」など<人の生死を考える機会>であった。

3つ目のカテゴリーは、「人の体について様々な新しい発見ができると思うので今後も続けてほしい」、「二度とないとても貴重な経験だと思うので今後も行うべき」、「一年次だけでなく毎年見学に行きたい」、「二度とないとても貴重な経験だと思うので、自らが体験できることとして、そしてこれからそういう経験をする前の体験として、今後も行うべきだと思う。」など<貴重な体験である解剖見学実習の継続必要性>であった。

4つ目のカテゴリーは、「寝る前にフラッシュバックがありびっくりした。初めての経験でショックを受けていたのかもしれない。でもそれより学べたことのほうが大きくて、見学できてよかった」、「実際にご遺体を生で見て大丈夫かと不安だったが、もっと違いを知りたいと積極的に見て回ることができた」など<不安やショックから知的好奇心への転換>であった。

5つ目のカテゴリーは、「見学する時間をもう少し長くしてほしい」や「できれば解剖学が終わりすぐに見学に行くほうが生理学に進むための準備になる」「わかりにくい部分があったので解説する教員の人数を増やしてほしい」など<解剖見学実習への要望>であった。解剖見学実習について、今後の継続を希望する意見が多数であった。

考察

1. 調査結果の考察

1) 学生の解剖見学実習での学びと実習に対する怖さや不安等気持ちの変化と解剖見学実習継続について(Q1～Q10)

「目で見ることで臓器の位置関係の理解が深まった」学生は92.0%、「手で触ることで臓器の感触の違い等がわかった」学生は96.6%、「一人ひとり臓器の大きさや形、色等が異なり個体差がわかった」学生は96.6%であった。これらは教科書の平面図や人体模型ではわからない人体の内部の臓器を、目で見て触れて感じたことで実感として臓器そのものの理解が深まっ

たことを表している。また、解剖見学実習前オリエンテーションでの事前指導や各学生の前学習により、前向きに解剖見学実習に取り組む姿勢が出来ていたことも、当日の学生の学びを深めた理由の一つと思われる。「性別・年齢による臓器の違いについてわかった」学生は72.4%であった。これは、性別や年齢の違う献体を見学できた学生とできなかった学生がいることを表している。今後の解剖見学実習の課題になると思われた。

「人体への知的好奇心が高まり学習への動機づけとなった」学生は80.5%、「命の尊さ・人体のしくみの素晴らしさが学べた」学生は92.0%であった。これによって学生は、今まで想像でしかわからなかった人体の内部を、実際に見て触れることによって自分を含む身体のしくみがどうなっているかがわかり、感動するとともにもっと知りたいという知的好奇心を刺激されたことが伺える。「医療の発展を願い献体をしてくださった方・家族の思いを考える機会となった」学生は85.1%であった。8割以上の学生は、献体をしてくださった方々の協力があって今回の解剖見学実習が実現し、学生は人体の素晴らしさを知る体験ができたことを理解していることを示唆している。

これらの内容は人体の構造の学び、看護実践に活用できる知識として今後の学習に活かしたい、献体者やその家族への感謝、生命の神秘や命の大切さの確認など文献から見た既存の解剖見学実習からの学びと共通する内容である⁹⁾¹⁰⁾。

「怖さや不安、ショックはあったが見学を通して気持ち前向きに変化した」と答えた学生は63.2%、「怖さや不安、ショックが大きく、できれば今後は見学を避けたい」学生は0%であった。また、解剖見学実習継続については、解剖見学実習を続けた方がよいと答えた学生は91%、なくてよいが0%、どちらでもよいは8%であった。解剖見学実習への怖さや不安、ショックを持っていた学生で、見学で前向きに気持ちに変化した学生が全体の6割以上おり、学生が見学をしなければよかったと考える学生は一人もいなかったということは、この解剖見学実習の体験が、怖さや不安を凌ぐほど学生を引きつけ、知的好奇心を刺激したことがわかる。そして、9割以上の学生は、解剖見学実習が自分にとって有意義であったことを示している。

2) 解剖見学実習についての自由記述

抽出された5つのカテゴリーのうち、<教科書の知識から臓器を見て感じてわかった感覚への転換>では、「授業で聞いたり、動画を見るだけではわからな

と思う。だから、実際に触れたり見たりいい機会になった」「教科書に書いていることだけでなく、実際に見て触ることでより理解がふかまったのですごくよい体験になった」など、実体験を通じてわかったという感覚を、わかる前の座学での知識と対比しての記述がみられる。

〈人の生死を考える機会〉では、「今回の実習を通して、人の生死について考えるきっかけにもなったし、以前に考えていた時と気持ちがまた変わった」「看護師とは人の死を受け入れていかなければならない職業であり、そのことを考える良い機会となった」など、看護師になる上で、これから繰り返し考えていく生と死について、この解剖見学実習を考える機会となったと捉えている学生がいた。

〈貴重な体験である解剖見学実習の継続必要性〉に関するものでは、「二度とないとても貴重な経験だと思うので、自らが体験できることとして今後も行うべきだと思う」「こういう本物に触れる機会がもっと欲しい」など、後輩にも是非同じような体験を行って欲しい、もっとこのような体験学習を増やして欲しいなどの貴重な体験を継続する必要性が多く記載されていた。これは、9項目の質問項目結果とも合致するものであった。

〈不安やショックから知的好奇心への転換〉では、「実際にご遺体を見て大丈夫なのかと不安だったが、もっと違いを知りたいと積極的に見て回ることができた」「寝る前にフラッシュバックがあってびっくりした。初めての経験でショックを受けていたのかもしれない。でも、そのショックよりも、学べたことの方が大きくて、私は見学できてよかった」など、質問項目 Q5～Q8 の内容を具体的に表している内容が見られた。人体を実際に見て触れて理解できたことが、学生の行動や感情にポジティブな影響を与え、大きく変化させていることがわかる。

最も多い記述は、〈解剖見学実習への要望〉であった。「付き添い教員がもっといれば質問しやすい」「来年度もだができることなら自分たちももう一度してみたい。なぜなら、より知識・経験があれば今後に大きく繋がるから」「できれば解剖学が終わりすぐに見学しに行く方が、生理学に進むための準備になると思う」など、解剖見学実習をよりよくするための前向きな要望ばかりであった。学生がこの解剖見学実習を体験したことで、もっとよりよい学びをしたかったという学習に対する意欲が伝わってくる結果であり、教員側の課題を示唆するものであった。

2. アクティブ・ラーニングによる学習の深化

アンケート調査結果は、簡単な質問項目を学生に短時間で回答してもらったため、自由記述に関しては一部の学生の記述に留まったが、実習事後に提出された学生のレポートには、今回の解剖見学実習が、学生にアクティブ・ラーニングとしてどのように機能したかを推測し得る記述が数多く見られた。一部抜粋すると、「臓器は全て大きく、堂々としているようだった・・・肺も予想よりはるかに大きく重かった。肺が、2葉と3葉にわかれているのを発見し（知識としては知っていた）、どのような構造なのかしっかり見ることができた。」「実習を終えて後悔したことは、もっと見ることがあったはずなのに、生殖器や眼球などを見れていない・・・臓器ばかりを見ていたため、骨や腕、足を（ちゃんと）見れていない・・・」とこの学生は表現している。実際に見て触れることで学生は新たな発見をし、しっかりと実感としてわかったという表現とともに、実物をちゃんと見ることができなかった部位に関しては後悔しているとさえ記述している。なぜ学生は後悔しているのか。実物を見ないとわかったとは言えない感覚を学生はこの解剖見学実習で体験し、座学で得た知識との格段の差を実感したからではないかと推測される。

このように多くの学生は、解剖見学実習での体験について具体的に描写を交えながら、人体の内部がわかった実感を自分の言葉で伝え、発見ができたよるこびや感動を記述している。そのうえで、更に学生は、人体の内部を見て触れることで、人の身体のしくみの複雑さや不思議さ、偉大さを感じ、レポートに次のように記述している。「初めに思った感想は、自分の身体の中にもあるということに驚いたことです。」「上行大動脈と上大静脈が太く、人間は生きることができているということを改めて考えさせられた」「今、自分が考え思っ、こうやって字を書くことができるのも、見て聴いて、様々なことができるのも、臓器、脳、神経、筋肉、あらゆるところが動いて・・・凄さを感じました。今まであまり考えたことのなかったことを考えるきっかけになった・・・」であった。これは、下高原・今村（2006）の人体は神秘的で不思議なものであり、自分の身体の仕組みに感心した様子の記述や、福田・澁谷（2008）の身体の構造について深く考えさせられたという自由記述と同様であった⁷⁾¹⁰⁾。

福田・澁谷ら（2008）の実習後の学生の記述の中には、解剖学について、「看護の『その人全体をみる』という概念から離れていて、看護とは真逆のことと感

じた」というものがあるが、本学の学生のレポートには、「今まで座学で学んできた臓器の外観や人体を形・全体として捉えていた感覚から、生活体としての人間ととらえることができ、看護の視点とこの解剖生理としてより実感ができた。」などの記述があり、解剖見学実習が解剖生理学の知識と看護を統合する橋渡しの役割をしていることに気づく学生がいた⁷⁾。また、「見学で感じたことは、人の生命の尊さ・重さを感じられたことと、自分の知識量はこんなものなのかと痛いほど現実を突き付けられた。」という勉強不足に気づき、解剖学の知識の必要性を感じたと記述する学生もいた。学生は、人体を見て触れることで、自分の身体を実感し、更に人が生きること、死ぬことへの考えや思いを深化させており、この解剖見学実習が人の生命に関わる仕事である看護師になるための勉強への動機付けとなったことを記述した学生もいた。

生命科学者の中村(2013)は、「わかる」ということについて、「生きている」ことの大切さや魅力を感じる日常感覚が、「知ること」によって刺激され豊かになっていくのが楽しく、それが「わかる」という気持ち、ああ生きものってそういうものなんだと思い、納得する感じにつながり、これは知識ではなく、心にストンと落ち、自分が生きものであることと重なり合う感じと述べている¹¹⁾。

教育哲学者ジョン・デューイ(John Dewey)は、知識を形式的に暗記し試験するという受動的伝統的な教育を批判し、子どもたちが目を輝かせて仲間と取り組むような活動を通して知識を吸収し、人間として成長することを実験学校によって目指したことで知られる。「為すことによって学ぶ」(Learning by Doing)というデューイの言葉は、知識とは外部から無理矢理与えられるものではなく、自ら獲得するものであるということを表している。教育はそのような経験が最大限可能になるよう、状況・環境を設定する役割をもつという¹²⁾。また、経験は後の経験に続くものであり、その質に大きく影響を与えるという¹³⁾。

今回の解剖見学実習を通して、「わかる」ことが楽しく、更に学びたいという意欲や行動を自ら持ち続けられる看護師へと成長していくためには、アクティブ・ラーニングである体験学習を効果的に取り入れることによって「わかる」体験を増やしていくことが方策の一つであることが示唆された。

今回の解剖見学実習において、アンケート調査の自由記述やレポートからは学生の心理的影響について問題は認められなかったが、今後学生が実習でどのような影響を受けたかについて、課題として検討を行っていく必要がある。また、本校の解剖見学実習は、他大学の受け入れ協力による限られた場であること、解剖生理学の専門教員は1名のみであり、今後各領域の授業や看護学実習が開始されることによって看護教員が解剖見学実習にどこまで関われるかは現在の時点での見通しは不透明である。しかしながら、学生が今回有意義な体験として実感できたこの解剖見学実習は、必要であるとの学生からの要望も多いため、学生の主体的な学習意欲や行動を引き出すためのステップとして是非継続させていきたい。そのためには、実習場所である他大学をはじめ、本学教職員の方々の協力を頂き、より効果的な解剖見学実習の実現に向けて、今回の実習を踏まえ事前・事後学習や実習方法などの検討を重ねていく必要がある。更に、学生が自ら主体的に学修し、成長していくことにつながるアクティブ・ラーニングについて、新たな深化につながるよう今後も検討していきたい。

今後の課題

参考文献

- 1) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告 文部科学省 2011.
- 2) 中央教育審議会答申 学士力の構築に向けて 2008.
- 3) 平成 16 年看護学教育の在り方に関する検討会（第二次）報告書.
- 4) 内山安男, 養老孟司編. 新体系 看護学全書 人体の構造と機能① 解剖生理学. 第 2 版第 2 刷 P4. メジカルフレンド社 2014.
- 5) 坂下玲子, 内布敦子, 桐村智子他. 看護学的視点による形態機能学教育の再構築 兵庫県立看護大学紀要 2004, 11, 57-66.
- 6) 澁谷幸, 福田敦子他. 人体解剖実習は看護教育に必要なか 神戸大学医学部保健学科における取り組みから. 看護教育 2008, 49, 219-24.
- 7) 福田敦子, 澁谷幸他. 「解剖学実習」を解剖する. 看護教育 2008, 49, 225-230.
- 8) 熊谷晶子, 竹村真理他. 看護基礎教育における解剖見学実習の教育効果その 1 (平成 20 年度). 横花創英短期大学紀要 2009, 73-9.
- 9) 古屋敷明美, 田村典子, 石野レイ子他. 看護学科における解剖遺体見学実習の意義—実習後の感想文の分析から—. 広島県立保健福祉短期大学紀要 2000, 5, 25-33.
- 10) 下高原理恵, 今村利香. 看護学生が解剖見学実習をとおして学んだもの --4 学校の実習後のレポート分析より. 日本看護学会論文集. 看護教育 2006, 37, 407-9.
- 11) 中村桂子. 科学者が人間であること. 岩波新書 2013.
- 12) ジョン・デューイ著. 宮原誠一訳 学校と社会 岩波文庫 1957.
- 13) ジョン・デューイ著. 市村尚久訳 経験と教育 講談社学術文庫 2004.